『総合政策論叢』第5号（2003年3月）
島根県立大学 総合政策学会

# ジャコバイト反乱とスコットランド

渡 辺 有 二

目 次

はじめに
1．スコットランド合邦とジャコバイト
2．1715年の反乱
(1)経緯
(2)クラン・宗教・ジャコバイト
(3)キャンベル王国
3．ヨーロッパ情勢の変化とジャコバイト
(1)英仏同盟とジャコバイト
(2)英仏同盟の崩壊とジャコバイト
4．1745年の反乱
(1)チャールズの上陸と西ハイランド
(2)政府の対応と権力の空白
(3)ジャコバイト神話と実像
(4)密貿易とジャコバイト
(5)ダービーからカロードゥン・反乱の終焉
総括と展望

## はじめに

18世紀前半のジャコバイト反乱は、伝説と神話に彩られたスコットランド史の中でも最も劇的な出来事であり、ともすればスコットランド独立や愛国心のシンボルとして、ジャコバイトと勇敢な高地人のイメージが重複し、同時代人の間でも本質的にはカトリックのクランを中心としたハイランドのケルト人が起こした反乱であったとする見解が一般に流布していた。その後ロマン主義の時代に悲劇の英雄としてのボニー・プリンス・チャーリー像が生まれ、例えばウォルター・スコットによって、実際の政治的意味を奪い取られた高貴なメランコリー・ノスタルジアとしてのジャコバイト神話が創出されることとなったのである。近年においても、この反乱は基本的には伝統的なハイランドと近代化しつつあるローランドとの戦いで、商業階級は反乱を不幸な中断とみなしローランドの商人や中産階級はジャコバイト主義を拒否したとされることもしばしばであった。 また、とりわけイングランド史の側からはウィッグとトーリーの政争の中で生じた、時代錯誤の少数者による成功の見込みのない反乱とされ、必ずしも本格的歴史研究の対象として扱われることは

少なかったといっても過言ではない。

しかし最近の研究は、この政治的宗教的混乱の時期にハノーヴァー政権が直面した危険を強調し、スチュアート王朝がトーリー内部からの支持を得たのみならずフランスやスペインの援助を期待することができたとし、特に英仏同盟が崩壊しオーストリア継承戦争が開始された後の1745年の反乱は、当時も深刻に受け止められた点を指摘している。またジャコバイト反乱は名誉革命と1707年合邦の文脈の中で起き、高地地方のみならず特に北東部で強固な勢力基盤を持つ監督制教会派を中心としスコットランド独立を回復するナショナリズムの様相も帯び、合邦条約の破棄と監督制教会の復権が共通のスローガンとなっていた点を重視し再評価する傾向にある[1)]。

本稿は、このような最近のジャコバイト研究の成果を取り入れながら、当時のヨーロッパ国際関係の中におけるスコットランドの政治・軍事状況の変化を考慮しつつ、ジャコバイト反乱に参加した兵士の出身地別統計、高地地方のクラン内部の政治的経済的宗教的支配の変容、スコットランド北東部の政治経済構造の変動と密貿易、監督教会派とジャコバイトとの関係等についての解明を視野に入れながら、ジャコバイト反乱の持つ意義を再検討するものである。

## 1．スコットランド合邦とジャコバイト

1688年から89年の名誉革命の間に追放されたジェームスⅡ世に対する忠誠の誓いを護り、新国王ウィリアムとメアリへの忠誠宣誓を拒否した監督制教会派は、スコットランド南西部の長老派勢力の優勢な地域では多数の聖職者・信者が追放されたが、ハイランドとスコットランド北東部で勢力を維持していた。スチュワート家の復位を目指すジャコバイト主義は、J.G.ダンディーがジャコバイトの旗を上げた1689年に軍事的政治的勢力として登場する。主として東ハイランドを舞台とする最初のジャコバイト反乱は、1689年7月26日のキリクランキーで勝利をおさめた。しかしダンディーは、グレンガリ、スリートのマクドナルド、アピンのスチュワート、ジョン・マクラウド、ケポッホのマクドナルド、グレンコーのマクドナルド、クランラナルド、ロヒール、アレグザンダー・マクリンなど西部のクランにほとんど依拠しており、ローランド・ジェントリのかなりの数がジャコバイトに同情的であったが、実際にダンディー勢力についたのは少数であった。こうしてダンディー派にとって、ハイランド以外での勝利は困難となり、結局1692年までに最初のジャコバイト反乱は鎮圧される[2)]。

ジャコバイト主義を国家の脅威に変えることになるのは、イングランドとの合邦であった。1707年、スコットランド王国とイングランド王国は、グレイト・ブリテンとして、ひとつの議会の下で合邦することになり、ハノーヴァー家による王位継承が受け入れられた。スコットランドでは、この条約が不評なことはすぐに明らかとなった。合邦条約の中では、最終的に長老制教会をスコットランド国教会とした条項は重要であった。長老派が1706年11月20日に合邦に関する記事を燃やしたとき、譲歩としてこの条項が導入されたのである。スコットランドでは、1707年の合邦条約以来ハノーヴァ政権に対する憤りが、貴族と地主階級の中でも増し続けていた。合邦条約によってスコットランドの貴族から16人を上院に選出することになったが、これらの選挙は政府によって操られ、選挙というより王室の官吏による指名であり、スコットランドの指導的貴族は内閣の従者と変わ

りなくなった。経済的にも、合邦直前にデフォーのようなプロパガンダによって主張された合邦による利益が現れるのはかなりの年月を必要とし、当初スコットランドの商人は競争の厳しさにあえいでいた。一方、合邦直後には南西部の長老派キャメロンがジャコバイト反乱を支持する動きも見られたが、長老主義は1710年代後半までにプロテスタント継承の砦となり、アーガイルのキャンベル家やサザランドのゴードン家の影響下にあるクランの中にも定着し、ウィリアムとその後継者を支持した。しかし東北部の多くの教区では、1710年代後半まで長老派の聖職者は存在しなかった[3)]。

1695年から1715年のスペイン継承戦争は、ヨーロッパのみならず植民地支配をめぐる英仏戦争でもあり、フランスはジャコバイトを援助し、パリ郊外の宮殿と年金をジェームスに提供したのみならず、1701年、彼の死後、その子ジェームス・スチュアートを英国王と宣言した。1708年3月フランスは、その老僭称王軍をスコットランドに派遣し、船隊はフォース湾に達したが英国艦隊を眼にして逃亡した[4)]。この時もしスコットランドに強力な行政府が存在したなら、ジャコバイトは厳罰に処せられたであろうが、枢密院は機能停止状態であり、1708年の議会選挙における宮廷派と遊撃党の対立の中で枢密院は廃止され、公共の秩序の維持者が存在しなくなった[5)]

## 2．1715年の反乱

(1)経緯

アン女王治世末期には、議会の幾多の法律がスコットランドの経済的利益に反するものとなった。例えば1712年には、合邦条約に反しモルト税をスコットランドに課す提案が出され、1713年夏までに内閣が内部分裂するまでになった。ボリングブルックはトーリー急進派やジャコバイトと手を結び、オクスフォード伯はウィッグやハノーヴァー派の和平提案への強い反対を考慮し、スコットランド人を懐柔するためマー伯に国務長官職を与えた。1714年7月27日、オクスフォードはアンによって解任されたが、ボリングブルックは女王が8月1日に死亡する前に内閣を組織することができなかった。ボリングブルック、マーその他も解任されジャコバイトに接近する。ハイランド地方ではジャコバイトの活動がみられたが、マーの豹変がなければクランチーフ達が騒ぎをおこすことはなかった[6)]。

マー伯は反乱計画を練り上げ、東北部で積極的な募兵を行い、イングランドでは戦闘準備ができており、ジェームズ王やフランスの大軍も進軍に備えているとして、西部諸氏族に蜂起を呼びかけた。こうして1715年9月6日にはジェームズ王旗がブレイマーに掲げられた。この反乱は主として元トーリーの大臣グループによって構成され、陸軍の元最高司令官オーマンド公、元大蔵大臣ウィリアム・ウィンダムを含んでいた。かくしてホイッグによる迫害に直面したマー伯やその仲間は、スチュアート王家の復位計画に着手したのであり、エリート層の不満は少数者の官職やパトロネージ、報酬の分配によって増大していた。1715年反乱の最初に、スチュアート家は合邦の撤廃と独立的スコットランド議会の再設立を公的に宣言した。合邦条約撤廃が彼らのモットーとなり、ジャコバイトはスコットランドの自由とナショナリズムの擁護者という様相を帯びることとなった[7)]。

この反乱はまた、1688年の最初の反乱よりも深く広い支持層をもっていた。第2代アーガイル公ジョン・キャンベルに指揮された4,000人の政府軍に対し、マー伯はおよそ1万の歩兵と騎兵というジャコバイト最強の軍隊を召集することができた。さらに重要なこと

は、今やローランドや特に北東部の大地主から支持されており、また北東部イングランドの反乱は不満を抱く地域の軍事提携の可能性を示していた。ジャコバイトにとって反乱の見通しは明るいものだった。マーはハイランドの分遣隊を受け入れローランド北東部で集めた軍隊と共に南に進軍した。9月14日、難なくパースを確保し半月後にそこを司令部と定めた。ジャコバイトが得た支持を他の都市や戦場での勝利に変える必要があったが、彼は諸氏族の到着を待ち、その地に留まっていた。マキントッシュ氏族、マクドナルド氏族、キャメロン家、アーソル家の郎党その他、多くのクランが参集したが、マーはパースで悠々と時を過ごした。南への進軍の遅れは重大であり、直ちに小規模な政府軍を攻撃せず、フランスの支援やジェームス王や多くの軍隊が集まるのを待った。その間に政府側のアーガイル公は1,500人の正規軍と1,500人の志願兵を集めることができた[8)]。

アーガイルはスターリングに陣地を定め、マー伯は11月13日、シェリフミュルでアーガイル軍と一戦を交えたが、パースに退いて再び進軍するのを拒否した。一方、東北ローランドとハイランドはサザーランドの軍隊に曝され、ジャコバイトの兵士達は郷土防衛のためマー軍から脱走し崩壊し始めた。その間、アーガイルは軍を結集し、イングランドの援軍と6,000名のオランダ軍が増強された。僭称王ジェームスは12月22日ピーターヘッドに到着したが、パースのジャコバイト軍はジェームスがフランス軍を率いて来なかったことに失望した。スコットランド到着後、ジェームスはルイ15世の摂政オルレアン公に援軍を求めたが望みはなかった。1713年のユトレヒト条約後、英仏関係は親密となっており、はるかに大規模になったアーガイル軍は1月パースに進撃した。ジャコバイト軍は離散し、ジェームズ軍もハノーヴァー軍を前に退却し始めた。モントローズに退却した軍隊はジェームスとマー伯に見捨てられマー自身も2月4日フランスに逃亡した[9)]。

このジャコバイト反乱の計画は、フランス軍と合流してロンドンに進軍するというものであったが、1715年9月12日、権力を掌握した摂政オルレアン公はルイ14世と異なり自らの王位継承の要求にイギリスの承認を得ようと企て、ジャコバイト支援を望んでいなかった。こうして反乱失敗の原因は、指導者側の軍事能力不足とともに、フランスとの情報交換の欠如に見出されるのであるが、しかし、この反乱はスコットランドにおいて多数の支持者を生み、イギリスの政権基盤を揺るがしかねない大事件でもあった[10)]。

(2)クラン・宗教・ジャコバイト

1715年のジャコバイト反乱に対する支持はハイランドのジャコバイトクランだけでなく、特に北東部ローランド、テイ川以北の監督制教会の中心地域からも得られた。彼らはステュアート王権への信念を共有し、ジェームス生存中はスコットランド国教会正統の長と考え、その死後も1702年に即位したアン女王を承認しなかった。1715年10月上旬には10,666人の歩兵と1,617人の騎兵が存在し10月下旬までにさらに数千が徴集された。政府の見積りでは、クランズマンは17,700人中、4,100人(23%)であった。結局、実際に徴集されたマーの総軍は約2万近い人数に達した。こうしてマイケル・リンチが述べたこととは逆に、15年の反乱はハイランドの反乱ではなく、その支持の中心は、アバディーン、アンガス等の北東部にあった[11)]。

これに対して、第2代アーガイル公ジョン・キャンベルの指揮下のハノーヴァー軍は、志願兵不足のため6,000人のオランダ補助兵と下士官兵、将校に頼らざるをえなかった。

アーガイル公とサザーランド伯、インヴァネス周辺の長老派小ジェントリを別にして、フォース川以北ではほとんどの貴族がジャコバイトを支持した。しかしローランド貴族の多くは便宜的にハノーヴァー主義をとり、長老派地方ジェントリやそのテナントと提携した。ブルース・レンマンも論じたように、1715年の反乱は、神話とは逆にハイランドだけの事件ではなく、またハイランドとローランドとの戦いですらなかった。クランを結びつける親族関係の絆は、1720年代までに、商業的経済的圧力の下で徐々に弱まり、ローランドのクランチーフは地主階級と同じ信念を共有していた。グレンガリーのマクドナルドは、1715年反乱失敗の後、彼の不満は国王ジョージにではなく、ウォルポール、スタンホープなどホイッグ政治家や大臣達の権力に対してであったと述べた[12]。

ハイランドクランは宗教的にも対立し、長老派は合邦に反対したがホイッグとして監督制教会に反対していた。アラン・マキンはハイランドクランを詳細に分析し、8人を支配的長老主義者とし、そのすべてがホイッグ政府とハノーヴァー継承を支持したとしている。最も重要なのはキャンベル家のアーガイルで、ウィリアムⅢ世への忠誠に対する報酬として公爵に登りつめた人物である。彼らはホイッグ政府の政治的代理人としてスコットランドで政治権力を行使した。北部では、マッケイ、ガン、ロスのようなホイッグのクランがゴードン家のサザランド伯と同じように長老主義の宗教を共有した[13]。

別の6のクランはカトリックで、スリートのマクドナルド、クランダナルドのマクドナルド、グレンガリー、ケポッホ、ストラスグラスのチソーム、バラのマクネイル等は皆、1715年の反乱に加わったが、ジャコバイト勢力の1/5以上を構成することはなかった。カトリックが大部分というジャコバイトクランのイメージは、ホイッグのプロパガンダの産物であり、カトリックは1750年頃のスコットランド人口の約2％であったが、彼らはフランスやスペインのカトリック勢力との結びつきを強めることを可能にした[14]。

ハイランドクランのうち約15は監督制教会に共感し、5は混合した宗派であり、これらのクランは1715年にスチュアート主義を全面的に支持した。彼らのほとんどは、1640年代の内乱までさかのぼるスチュアート王政への忠誠の歴史を持っていたが、その行動は、コヴナント運動の長老派リーダーの最も重要な人物でもあったアーガイル伯キャンベルに対する敵意によるものであり、マクドナルドとキャンベル家のクラン戦争は過去のものになっていたが、クランの忠誠心はまだ強いまま残っていた。ウィリアム・マケンジーはジェームス・エドワードに味方すると宣言し、約1,500人のクランズマンを召集し、スカイ島からドナルド・マクドナルド、第4代スリート男爵の700人のクランズマンも加わった[15]。

また、ステュアートへの潜在的な共感があったとしても、ジャコバイトへの実際の軍事的支持は時と空間とクラン内部でも変化し1689年に、約28のクランがステュアートのために立ち上がったが、最後の反乱の45年までには18に減少した。いくつかの家族が政治的宗教的問題で分裂し、1689-91年にはジャコバイト軍は圧倒的にクランから構成されていたが、1715年と1745-6年には、ローランド人がはるかに多数動員された。しかし、クランズマンは戦いで最も大きな被害を被った最前線の襲撃軍であった[16]。3つの反乱すべてで、ジャコバイトの支持はホイッグへの支持よりも一貫して高かった。

(3)キャンベル王国

1701年にクランキャンベルのチーフに国王ウィリアムが公爵の位を与えたことは、ホ

イッグの一大クランがスコットランドに出現したことを意味した。彼らの伝統的権力は次第に政治的パトロネージによってとってかわられ、1707年の合邦後、貴族達はロンドンに移住し、地方の問題に直接関与することは少なくなり、地方の支配も変容していく[17]。

クランの中で、リースやタックス（長期借地）によってチーフの土地を保有し、サブテナント（下級借地人）から地代を受け取るタクスマンは、18世紀初めのアーガイル所領では、彼らがチーフに渡す額より30%多い地代を集めていた。多くのチーフにとって、幾世代にもわたる負債の重荷はかなり致命的なものであった。地代を集め、クランの祝宴で生産物を消費する古い伝統は過去のものとなっており、多くのチーフが現金をますます必要としていた。古い独立的なハイランド経済は低地地方の市場に依存することとなり、黒牛の輸出が増加した。第2代アーガイル公は、彼のビジネス・マネージャ、カロードゥンのダンカン・フォーブズの忠告に基づいて、タクスマンの代わりに最も高い落札者に農場を賃貸させることによって、クラン社会の変容を象徴するものとなった[18]。

こうしてアーガイル所領では、牛の大放牧地を直接的管理のもとで経営し始め、商業的羊牧業の到来前に、土地収入を飛躍的に増やすことを可能にした。アーガイル家とクランズメンとを結びつけていたタクスマンの除去によって、支配は伝統的権力ではなく、経済的なものに基礎をおくことになった。これらの改革は事実上、クラン制度を崩壊させた。アーガイル家所領でのクラン制度の伝統的な価値の消滅は、キャンベル氏族が、1745年のジャコバイトの反乱に対して、戦闘態勢をとれなかったことを説明することにもなり、クラン制度の崩壊は間もなく高地地方全体に広まっていくこととなった[19]。

またスコットランド貴族のほとんどは、毎年ロンドンへの旅行や滞在に多額の費用を必要としたため、政府の与える地位と官職、年金などのパトロネージを求めて行動し、イングランドのウィッグも、スコットランド支配のためにパトロネージを駆使した。1714年、ジョージⅠ世の即位後、党派対立はウィッグ内部の権力闘争の様相を呈し、スコットランドはウィッグのロクスバラ公、モントローズ公などスクアドロンと呼ばれる派閥と、二代アーガイル公、その弟アイレイ伯らアーガイル派によって支配されることになる。当初、スクアドロン派が勝利し、1714年9月から16年12月まではモントローズ公が、1715年8月から25年8月までロクスバラ公がスコットランド国務相として地方行政官を監督したが、彼らの権力基盤は弱体で決定的な権力はなかった。ウォルポールは1725年のモルト税問題の責任をロクスバラ公に求め9月に退陣させた[20]。

その後、ウォルポールは公式の国務相をおかず、アイレイを事実上のスコットランド国務相として官職の分配権を与え、彼を媒介としてスコットランドを支配しようとした。キャンベル体制の真の確立者はアイレイであるが、兄である第2代アーガイル公とともにキャンベル王国の全盛期を築くことになった。アイレイがウォルポールから得たパトロネージによる富はキャンベル家の権力のもう1つの源泉となり、その後もインヴァレリーにゴシック様式の城や庭園を造り、埠頭と運河を持つニュータウンを建設し、前述した所領改良と相まって新たな産業と定住計画を推進した。こうしてキャンベル家はスターリング、ファイフ、パース、アンガス、インヴァネスなどスコットランドの1/3以上を占める広大な地域を支配することとなった。彼らはキャンベル家のメンバーである徴税委員や治安判事を制御し、第2代アーガイル公は所領のエージェントであるカローデンのフォーブズを民事裁判所長官として、第3代アーガイル公（アイレイ伯）はミルトンを重用した[21]。

一方、前述した改革によって下級所有地は落札者の手に渡ることになったが、それはクラン内部の忠誠を弱め、地主－借地人関係への移行が進行し、また厳格な計画と合理化は他方で住民の憤りも招いた。ジャコバイト主義はキャンベル家への憎しみによって増幅され、1738年にフォーブズはハイランド連隊の結成を提言し、第3代アーガイル公は1744年、借地の条件としてアーガイル家と現政府に忠誠をつくし、ジャコバイト反乱に加わらないよう借地人に誓わせた。こうしてウィッグの寡頭支配、スコットランド貴族のイギリスへの従属、政治的マネージャによるパトロネージや地位の独占は、逆にジャコバイトの反感を増大させ、ウォルポール、アーガイル公、フォーブズによるパトロネージの行使さえ、一握りのチーフと支配的なクランジェントリをジャコバイト派から引き離しただけであった。彼らのパトロネージも、小さな権力中枢部の集団に授与される利益を超えてスコットランド全体に影響力を持つことはなかったのである[22]。

## 3．ヨーロッパ情勢の変化とジャコバイト

(1)英仏同盟とジャコバイト

さて1715年の反乱は、ホイッグ政府にフランスとの和平維持の必要を再確認させ、英仏同盟は1744年まで続いた。ジャコバイトにとって強力な後援者を見出すことが成否の鍵であり、イギリス側もジャコバイトに対応するため、外交機関とスパイ活動を利用しようとした。当時スウェーデンはバルト海の覇権のためジョージI世に挑戦し、ハノーヴァー選定侯の手中にあったブレーメンとヴェルダンの領土回復を要求していた。このためジャコバイトはスウェーデン国王カール12世の使節と共謀しイギリス侵入を計画していたが、彼は1718年12月にノルウェー侵入中に殺された。またジャコバイトはスペインとの共同にも成功しつつあった。1713年のユトレヒト条約の下で、スペインはイタリアの領土やサルデーニャ、シチリア等を失い、フェリペ5世は領土奪還のため進軍したが、護衛船隊がメッシーナ近海でイギリス海軍に撃沈され、スペインはイギリスに宣戦布告した。一方フランスの摂政打倒の陰謀発覚後、フランスはスペインに宣戦し、スペインのアルベローニは、ジェームス・エドワードをイギリス国王にする目的で、第2代オーマンド公と共にイギリス侵入を計画していた。それはイングランド西部に主な攻撃をかけ、ハイランドに小規模攻撃を実施するものであった[23]。

5,000人の兵士と3万人分の兵器を積んで船隊が1719年3月7日に出帆した。しかし3月29日、嵐のためフィニステレ沖で船隊はちりぢりとなり、小規模の軍隊がスカイ島のキンテイルに到着したが、グレンシールの戦いで政府軍によって敗走させられた。フランスは英国支援のため軍隊の派遣さえした。1719年の反乱は失敗したが、この時スペインの兵器がハイランドに流れ込んで隠されていた。スペインの遠征は1725年の武装解除法につながったが、実際に武器を明け渡したのはホイッグのクランであり、そのことは1745年に彼らがハノーヴァー王朝のため駆けつけるのを妨げ、結局、武装解除法はその意図とは反対の効果をもたらすことにもなるのである[24]。

こうして1716年以降ジャコバイトが直面した問題は、英仏間の基本的利害の一致であった。ルイ14世の遺言は、甥オルレアンがルイ15世の幼年の間、摂政として務めることであった。また、1712年にスペインのフェリペ5世(ルイ14世の孫)によってなされたフラ

ンス王位継承権の放棄がフランス法で有効なら、ルイ15世の死後、オルレアンが王位継承者であった。その王位継承権は和平条約に基づいていたため、オルレアンは和平維持に明らかな関心を持っており、ハノーヴァー王家の安定を望むジョージI世もフランスとの戦争を求めていなかった。この両者の利害一致によって、1716年の英仏同盟は成立し、1740年代前半に同盟が崩壊するまで、これはジャコバイトにとって大きな障害となった。その影響はアタベリ陰謀、モルト税に対する暴動、コーンヴェリ事件などにおけるジャコバイトの対応においてもみられ、ジャコバイトはこれらの騒動を十分利用することはできなかった。確かなことは和平維持のフランスの利害がイギリスの政治危機利用の誘惑を封じ込め、ジャコバイトも外国軍隊の支援なしに行動しなかったことであるが、その英仏関係も徐々に冷却しつつあった[25]。

(2)英仏同盟の崩壊とジャコバイト

ジャコバイトの望みは、1730年代後半から40年代前半に蘇った。というのは、イギリスは1739年にジェンキンスの耳の戦争でスペインに宣戦布告し、1741年にはオーストリア継承戦争に巻き込まれたからである。スペインとの戦争のため砦から守備隊を移動させた1730年代後半からハイランドでは権力の真空状態が生じつつあった。1740年マリア・テレジアがハプスブルグ家の王位に就いたが、同年、プロシアはシレジアのオーストリア領を占領し、オーストリア継承戦争が始まった。フランス、バイエルン、スペイン、プロシアの同盟が結ばれ、オーストリアはイギリスとオランダに助けを求めウィーン条約でその立場は保証された。フランスは再びジャコバイト・カードを使うことを決めた。すでに1738年から1743年まで、センピル公はルイ15世の大臣達にジャコバイト反乱を支持するよう説得工作を行っていた。英仏の対立が現れ、双方がオーストリア継承戦争で敵味方に別れた時、センピル公は既に行ってきた予備交渉を続行することになった[26]。

こうして1743年に、フランスの外交政策は基本的に変化し、再び対ステュアート支援が検討課題として重視されることとなった。1743年春、ルイ15世は、イングランドにジェームス・バトラーを密偵として送り、ジャコバイトの支援を決定した。それはヨーロッパからイギリス軍を撤退させ、同時にハノーヴァー王家自体の崩壊をもくろむものでもあった。バトラーは1743年8月から10月の間に南イングランドでトーリーのリーダーと会い、侵入軍の規模などについて議論した。ルイ15世は11月にイングランド侵入を準備するよう大臣達に命令し、ローマ亡命中のチャールズ・エドワード・スチュアートを呼び出した。一方、マグレガーは1743年に蜂起を企てようとしたが、その計画はイギリスに雇われたフランス人スパイに漏れ計画は延期された。この後、多数のハイランド首長が盟約を結び、条件が満たされるなら、彼らの部族員を召集すると約束した。それは1744年2月中旬に予定され、1万のフランス軍が英仏海峡の海岸に秘かに集結する計画であった。そこで、彼らはチャールズ・エドワードと合流して上陸し、エセックスで地方のトーリーと合流し、直ちにロンドンに進撃することになっていた。英国政府は当初これに気づかなかったが、間もなくこの計画も発覚し多くのジャコバイトが逮捕され、しかも大嵐が2月24日に英仏海峡のフランス船隊を襲い、19隻の船隊のうち1隻は沈没し5隻が戦闘能力を失った。6カ月間準備してきたすべての物資と装備も事実上失われ、2月28日、チャールズは侵入計画が取り消されたと知らされた[27]。1745年反乱の時期までに、軍事情況はフランスに有

利に転換した。フランスは戦略的に重要なオランダを攻め、イギリスとオーストリア領オランダの同盟国に対するフランスの勝利の後、この地域を支配することとなった。これによってフランスはジャコバイトを支援して英国侵入を謀る必要はなくなった。オランダでのフランスの勝利が逆に、ハノーヴァ支持派にとって有利に展開することとなったのである[28]。

## 4．1745年の反乱

(1)チャールズの上陸と西ハイランド

1744年初め、フランスの侵入計画からスコットランドが除外されていたことに憤慨し、少数のクランチーフは、たとえチャールズ・エドワードが3,000人足らずのフランス軍と共に到着したとしても、彼を歓迎して蜂起するというメッセージをジョン・マレーを通して送った。少数のジャコバイトの助けを得て、チャールズは今や、その申し出に応じることになった。銀行家のJ.ウォーターズとエーネアス・マクドナルドに資金を提供され、アイルランドの700人の志願兵を率い、多数の兵器とともに西ハイランドに上陸する計画であった。少なくとも6,000人のフランス軍と1万の兵力、3万ルーブルの軍資金が、反乱成功の最低条件というジャコバイトの忠告も、チャールズを思いとどまらせることはできなかった。軍隊はエリザベス号とデュ・テイェ号で出航したが、4日目、英国軍艦と遭遇し、両方の船は破損し、エリザベス号は700人の軍隊と軍需品とともに引き返したが、デュ・テイェ号は航行し続け、7月23日チャールズは、モイダートの7人とともにヘブリディーズ諸島エリスケイの小島に上陸した[29]。

ノーマンマクラウドは既に政府側のダンカン・フォーブズに「私はこのあたりのいたる所で、反乱に味方するハイランド人を蜂起させるため、僭称王の長男がハイランドに上陸するというううわさが広まっていることを知らせざるを得ない」という手紙を書いていた。チャールズは上陸後、軍隊なしで来たのなら、この地方から期待されるべきものは何もなく、どんな指導者も加わらないため、引き返して都合の良い時まで待つべきというアレグサンダーマクドナルドとノーマンマクラウドからのメッセージを見せられたが、チャールズは、私は故郷に帰って来たのだとして、上記のスカイ島の2人の有力者の忠告を聞き入れなかった。当初チャールズは1743年にスコットランド侵入を要請したほとんどのクランチーフに拒絶されたが、個々のジャコバイトを説得し、ロヒールとマクファースンは補償の担保を条件に同意した。かくしてキンロッホモイダルトのマクドナルド、小クランラナルド、ロヒールの小キャメロンなどを味方に加えることとなったが、ダンヴェガンのマクラウドやスリートのマクドナルドなどは、同意の際の条件が守られなかったという理由で参加を拒絶した。これらのハイランド首長が節を曲げた結果、西部島嶼地帯は実際には反乱に貢献することは少なかった[30]。

アレグザンダー・マクドナルドとマクラウドが、ジャコバイトに加わるのを拒否した理由は他にもあった。クラン社会の変容はキャンベルだけではなく、1730年代後半にはクランチーフの利益追求はスカイ島にも及び、アレグサンダーは、彼の義理の兄弟、ダンヴェガンのノーマンマクラウドと共同して、100人以上の男女、子供を故郷から誘拐し、アメリカで年期奉公人として働かせるため人身売買しようとした。彼らを乗せた船はアイルランド北部で難破し、何人かが地元の行政官に訴えた。スカイ島の長老派教会は彼らを糾弾

し、この事件は急速に広まった。2人は、船に乗せたのは犯罪者だとして抗弁したが、その後の調査で羊を盗んだのは4、5人だけであることがわかった。マクラウドは1739年12月にダンカン・フォーブズに手紙で無実を訴えた。フォーブズは、この事件の他にグレンジ夫人拉致事件のことも知っていたが裁判に持ち込まれず、2人の重要なチーフが反乱に加わるのを阻止するため、この事件を利用したのである[31)]。

ともあれ、チャールズがロッホシールに出航した後、1745年8月19日にグレンフィナンにおいてジャコバイトの旗が挙げられた。チャールズの大胆な行動は当初、予期した以上の華々しい成功を収めた。クランチーフの忠誠によって2,500人の軍隊を集め、速やかにローランドに移動し、上陸後1ヶ月でエディンバラを占領、首都の南、プレストンパンでジョン・コープの政府軍を完全に敗走させた。その2日後、再度スリートのマクドナルドとマクラウドに支持を求める使いを送った。マクドナルドは揺れ動いたが、フォーブズに説得され、結局、政府側につき軍隊を徴集することになる。マクラウド家の中で、マルコムマクラウドと彼のいとこドナルドマクラウドだけがジャコバイト主義のため結集したが40人の兵士を集めただけである。他のスカイ島チーフの中で、ジョンマキノンだけは、1715年の反乱後、土地を全て没収され、チャールズの呼びかけに答えた[32)]。

(2)政府の対応と権力の空白

こうしてチャールズは、エディンバラで1745年10月9日合邦の終焉を宣言した。その後、ジャコバイト側には北部からの新軍が馳せ参じたが、テイ湾以南から反乱に参加した者はほとんどなく、支持者は主として監督教会派とカトリックで、その割合は70%と30%であった。グレンフィナンで反乱軍が旗揚げした時，政府軍のコープは、3,000人の軍隊しか持たず、キャンベル家は第2代アーガイル公の所領改良により、軍事的には弱体化しており、またグレンフィナン以降のジャコバイト軍の快進撃は、次にみる政府側の政治的軍事的混乱を露呈するものでもあった[33)]。

スコットランドではポーティアス事件以降、ウォルポールへの忠誠心は次第に減退し、1741年の総選挙では、下院の在野勢力スクアドロン派が27名となったのに対し、ウォルポール派は18名と大幅に減少し、1742年前半にはウォルポールが首相を辞任することとなった。これによってウォルポールとアイレイのスコットランド支配もついに崩壊する。これに代わってスコットランド相の職が第4代トィーデイル卿の下で復活したが、ミッチスンによればトィーデイルの任命こそが45年反乱の原因ともなった。反乱軍がイングランド進軍中の11月、トィーデイルは痛風等のため閣議を開かず、高地地方の地理に関する彼の知識も不十分であった。またスコットランド政府軍を分割し、ハイランド連隊をイングランドに移動させていた。しかしトィーデイルの最大の難点は、危機管理意識の欠如と、政敵であるアーガイルに対する長い間の対抗意識のためでもあった。

ジャコバイト軍の侵入と勢力増強のニュースが伝わるとイギリスの政治家達はスコットランドのウィッグクランが反乱軍を阻止できないことに驚愕したが、当初アーガイル公にはウィッグクランを徴兵する法的権限が存在しなかった。民兵徴集権はスコットランドの枢密院にあったが、既に廃止されていた。トィーデイルが最後まで躊躇したのは、その権限を政敵アーガイルに与えることによってその地位と名声を再び高めることであった。ジャコバイトの進軍を前にしてアーガイルとトィーデイルの確執は未だ消えず、トィーデイル

は45年9月まで何ら手をうたなかった。フォーブズは既に1738年、ハイランド連隊の結成を提案していたが政府によって拒否されていた。結局、新たな連隊の結成が認められたが、反乱が開始された時、その訓練不足のため役に立たず、ブラック・ウォッチも遠征中であった。こうして政治的にも軍事的にも、スコットランドでは権力の空白状態が続いており、これがジャコバイト軍の思わぬ快進撃を可能にしたのである。第3代アーガイル公は、彼を州長官として認め地方民兵の招集を認可する国王の証明書を、10月22日に受け取ったが、これはプレストンパンの政府軍総崩れの1カ月以上後、ジャコバイトのイングランド進軍の10日前のことであった[34]。ブラックは1745年の反乱を、18世紀のハノーヴァー朝が直面した最も重大な危機とみなした。反乱当初、イギリス軍の大部分は大陸に派遣されており、この反乱を単に無謀な猛進とのみ結論することはできない。次に見るようにこの反乱もまた、その力を中央・西部ハイランドと北東ローランドから得ていた。他方、ハノーヴァー支持派は、アーガイルを当主とするキャンベル家と、マカイ家、マンロウ家や長老派などに依存しえたのみであった[35]。

(3)ジャコバイト神話と実像

イングランドに進軍した軍隊は、伝説とは逆に、ハイランドのクランズマンだけで構成されたものではなかった。兵士はハイランド服を着用していたが、プレードは服の費用節約のためでもあり、ジョージマレー卿は、将校も兵士と同様、トゥルーズなしでキルトを着用し，兵士達に大きな勇気を与えたと記している。そのため反乱の中核はハイランド兵士という神話が間もなく生じたが、それは当時ホイッグのプロパガンダによって頻繁に主張された考えでもあった。プレストンパンのジャコバイト軍は、主として西ハイランド出身のクランズマンから構成されていたが、その後、下士官はパース、アンガス、ネアン、アバディーンといったローランド地域からの新兵加入で膨らんでいった。従来の研究の多くはこれを見落とす傾向があったのである。ジャコバイト軍の中でゲール語を話すハイランド人は実際には半数にも達しなかった。こうして1715年と同様に、1745年反乱の最大の支持は、テイ川以北の地域であった。1715年以来の弾圧にもかかわらず、監督制教会はここで生き残りジャコバイトの強固な源泉となっていた。当初参集したクランダナルドのアクドナルド、グレンガリやケポッホはカトリックであったが、後に反乱軍に加わったクランはほとんど監督制教会派であった[36]。

1715年と同様1745年のジャコバイト軍は、1689年の小規模なハイランド軍よりも、スコットランドの全面的動員に近いものになった。ジャコバイトにハイランドの支持があったことは事実であるが、ローランドでの支持を拡大させたのは合邦であり、ローランドの監督制教会の役割は重要であった。スコットランドの2/3はスチュアートに同情的であり、スコットランドの3/4以上の者が合邦に反対であった。とりわけ北東海岸は監督制教会派が多く、モレイとロスでは50%以上、アバディーンとアンガスでは40-50%、パースとスターリングでは約20%が監督制教会派であった[37]。

かつてリンチは、チャールズ・エドワードの反乱は、1708年と1715年反乱と異なり、初めから終わりまでハイランドの事件であった、と述べた。また同時代人の中にもチャールズの反乱がクランを基盤とする戦いであったとする者が多数を占めていた。例えばローズベリ公は次のように述べた。チャールズの軍隊は、「疑いもなく、本質的にはクランの

軍隊であり、わずか数人が宣誓拒否の監督制教会員であった」と。ハイランド以外で徴集された軍隊がファルカークの後で加わったことを認めたにもかかわらず、「イングランドへの侵入は実質的にケルト族の襲撃であった」と確信を持って述べた。クランの問題は18世紀のプロパガンダにおけるスコットランド人と高地人との明らかな混乱によって説明され、スコットランド愛国心のシンボルとしての貧しく軍国主義的な高地人のイメージは、ジャコバイトと同等物になり、高地人はゲール語地域を越えたスコットランドの象徴となっていった。ハイランド服の着用は、ローランド連隊将校の共通の習慣であり、1745年反乱の間に東海岸に上陸したフランス人将校もハイランド服を着ていたという証拠さえある。このユニフォームがジャコバイトクランの神話を生みだす1つの原因ともなったのである[38)]。

また1745年のジャコバイト軍はしばしば想定されてきたほど小規模ではなかった。チャールズは5,000-6,000人でイングランド遠征を行ったが、ローズベリ公は軍隊の総力を11,000人と見積もっていた。セッチも北部に残した軍隊のことを忘れ、ジャコバイト軍の数字を5,000人と言及しているが、カロードゥンの後、4,000人がルスベンに集合しており、1745年のジャコバイト軍の総数は11,000-14,000人に及んでいた。1715年以来、ハイランドとローランド両方の支持が減退していたが、これは有力者の支持の減少のためであり、例えばスリートのマクドナルドの不在もハイランドの数字に影響を及ぼした。1715年と同様、1745年には、軍隊の指導部は主にローランド出身者であった。高地人が軍事評議会で優勢で戦略的重要性が影響を与えたのは事実であるが、彼らは少数派であった[39)]。

また商業階級は1745年の反乱とは関係なく、ローランドの商人や専門家など中産階級は、ジャコバイト主義を全面的に拒絶したという伝統的見解がある。例えばR.H.キャンベルは、スコットランド中産階級の大多数は、反乱を不幸な中断とみなしていたとする。しかし、マッキンによって確認された北東部スコットランド出身の695人の新兵中、120人はジェントリ、29人は専門職で、109人が小作人、42人が商人、208人が労働者と召使いであった。アバディーンとバンフ州出身の757人中、ジェントリが101人、専門職、大商人、農夫が179人、小商人が159人、労働者が318人いた。アンガスでは、825人の新兵中、199人は商人、45人は農夫、284人は労働者であった。またエディンバラの新兵138人中、10人がジェントリ、13人が専門職、7人が別の中産階級、67人が小商人であった。以上の数字が示すことは、中産階級が反乱を支持しなかったという仮定は、ほとんど根拠がないということである。多くの著名なジャコバイトは、ロヒールのキャメロン、ジョージ・マレー、バーナード・ウォードやコーン・キャンベルのように、農業改良者であったり重要な商業的関心を持っていた。一方、窮迫したクランチーフが政府側につくこともあり、ローランドとハイランド・ジェントリの社会経済的差異は実際にはわずかであった。したがって、反乱が伝統的ハイランドと近代化途上のローランドとの戦いで、商業階級の中にほとんど支持を見出さなかったとする従来の見解は再検討を迫られているのである[40)]。

(4)密貿易とジャコバイト

密貿易業者も海外のジャコバイトとの接触のルートとその資金を提供した。スコットランドでは、合邦後のイギリスと同じ課税と関税賦課に対して反対が強まり、その合法性に対する信用が失われ、またスペイン継承戦争がフランスとの貿易に及ぼした損害について、

広範囲の不満が生じていた。グラスゴーは植民地貿易の拡大による合邦の唯一の受益者であったが、他の場所ではスコットランド人はイギリス貿易業者の犠牲者になった。1707年以降、貿易の比重はヨーロッパ大陸から西方の植民地に移り、植民地帝国を中心とするスコットランド経済軸の移動によって特に東海岸の主要な港は経済的に苦境に陥り、アバディーンやリースは言うまでもなくモントローズ、ストーンハイヴァン等のような東海岸の港や町は不満があふれていた。対仏戦争の再開はこの地域にさらなる貿易の混乱をもたらし、フランスやスチュアート家に味方して戦い、物品税課税を回避するため商品特にブランデーの取引を求めて外国に出かけ、密貿易が著しく活発になった。こうして密貿易の増加は、先細りの市場と差別的課税への東海岸の反応であった。

彼らは夜の闇に紛れて羊毛をフランスに密輸し、特に税の重いフランスのブランデー、レース、タバコ、紅茶、その他の商品を持ち帰っていたが、やがて、ジャコバイトのスパイ、資金、手紙の輸送も彼らの業務の一部になった。彼らは、北海両岸の共感をもつ商人や銀行家との間で通商ネットワークを構築し、ジャコバイトの時代には、それらのリンクはスパイや将校を募集するための隠れ蓑ともなった。密貿易業者は、メダル、印刷、肖像画などの文化的プロパガンダを広めただけでなく、フランス大西洋岸の商人共同体への参加権も持ち、ジャコバイト主義、監督制主義はそれによって支えられていた。周辺の同情的な地主も政治的経済的な理由で密貿易業者を援助した。こうして密貿易は政治活動の役割も果たし、1698、1717、1721、1745年の4回の密貿易条令（Smuggling Acts）は、ジャコバイト運動に対する不安の中で可決された。ジャコバイト侵入の準備が進行中であった1744年、税関関係者は「この地域の密貿易業者はあからさまに僭称王と彼の息子の健康のために乾杯し、彼らの軍隊の成功とジョージ国王陛下の退位を願うほど傲慢である」と述べたし、1745年にはヴァーノン提督も「この密貿易は正直で勤勉な漁師を怠惰で放蕩な密貿易業者に変え、今では我々のすべての議事の危険なスパイに変えた」と不平を漏らしている[41]。

(5) ダービーからカロードゥン・反乱の終焉

さてエディンバラ滞在中、イングランド進軍をめぐって長い議論が行われた。チャールズは、進軍すればイングランドのジャコバイトが立ち上がり、フランス軍侵入の引き金となるとして進軍を主張した。これに対しジョージ・マレーら軍事評議会の多くは、スコットランドにとどまり軍を結集統合し支配権を強化すべきと主張したが、イングランド進軍は1票差で決行され11月前半、5,500人の軍隊がボーダー地方を越え、12月4日、ダービーに到着した。しかしロンドン進軍をめぐって軍事評議会とチャールズとの議論の対立が生じ、結局、軍撤退の決定がなされることになる。ブラックも述べるように、これは45年反乱の終わりを予見するものであった[42]。

ダービーから撤退の決定がなされた時、フランスの大規模なイングランド侵入計画がかなり進められていたことは皮肉である。反乱成功の可能性が強まった9月下旬まで戦況を眺めていたフランスは11月に本格的準備を始めていた。反乱軍のダービー撤退のニュースが12月18日、フランスにもたらされたが、英仏海峡の港で23,000人の軍隊を維持し続けた。リシュールは侵入軍が12月26日午後、出航することに決定したが、重装備の船隊がヴァローニュを出航するためには満潮が必要で全船が出航できないことが判明した。

さらにイギリス海軍は英仏海峡の制海権を握りダンケルクでフランス軍を封鎖していた。リシュールは結局1746年2月1日に侵入計画を中止しパリに戻った。一方、反乱軍は1746年1月のファルカークの勝利の後、ハイランドへの退却が続き、その結果、ローランドへの課税によって戦費を調達することはできなくなり、この経済的苦境が最後の軍事的敗北へのプレリュードとなった。フランスの侵入計画の中止も悲惨な結果をもたらした。チャールズは、指揮官の主張するゲリラ戦よりもインヴァネス郊外のカロードゥンで戦うことを決め、1746年4月16日、両軍はカロードゥンの荒野で遭遇した。カロードゥンムアーは平坦で歩兵連隊の射撃に適しカンバランド軍は補給十分で大砲も装備していたが、ジャコバイト軍は半ば飢餓状態でネアンでの夜襲に失敗し疲弊しており、実際に戦ったのは5,000人未満で、食糧徴達に出た多数の者は戦闘に参加しなかった。約9,000人のカンバランドの政府軍は、数の上でもまさり全面的勝利をおさめた[43]。

チャールズはカロードゥンより脱出し、スリートのマクドナルドかマクラウドの助けを求めた。しかしスカイ島の船頭ドナルド・マクラウドは、2人のチーフの裏切りを恐れてスカイ島への同行を拒否した。実際、スリートのマクドナルド、マクラウドとクランズマンはカンバーラント軍と合流していた。ハイランド人の伝説じみた献身と保護によって5か月間ハイランドと島嶼地帯に身を隠したのち、チャールズは1746年9月前半にフランスに亡命し、ジョージ・マレー卿を含め大多数の指導者は大陸へ渡った。ジャコバイトの所領はカンバーラント軍の思うままになり、国王に忠実なクランさえカロードゥンの後1年間続いた略奪をまぬがれなかった。ハイランド服は反逆者のシンボルとして禁止され武装解除法も強化された。世襲的司法権と軍事的土地保有の撤廃はチーフの権力を破壊するものであった。北東部の州とハイランドの監督制教会の集会禁止法は、より重要であった。というのそれは監督制教会がジャコバイト主義の強力な支持者であったことを認めたからである。1746年、アバディーンに到着したカンバーラント公はすべての監督制主義聖職者を追放し、集会所とチャペルを破壊するよう命じた。これは北部の州全体で実行された。ジャコバイト主義の脅威が失われたのはハイランド和解というより、監督制教会弾圧によるローランド・ジャコバイト主義の決定的な弱化によるものであり、1755年までには監督制教会聖職者は10年前の1/5となった。1788年にチャールズが死去した後、イギリスの一般祈祷書の使用を司教に命令された時初めて、スコットランド監督制教会は最終的にジョージⅢ世に従うこととなるのである[44]。

## 総括と展望

上述した如く、ジャコバイト主義は単にスチュアート家復活を目的とする運動にとどまらず、特に1707年以降の合邦に対するスコットランドの分離独立の気運の中で高まった不平不満を表明する手段、方法であり、その牙城はアバディーンをはじめとするスコットランド北東部であった。名誉革命直後の最初のジャコバイト反乱は高地地方に限定されていたが、監督制教会派は高地地方と特にスコットランド北東部で勢力を維持していた。その後、1708年、1715年、1719年、1745-6年とジャコバイト反乱が起きたが、決定的な要素はフランス等の外国の支援であった。したがって、スチュアート主義の運命は、ヨーロッパの勢力均衡と密接に結びついており、特にフランスやイングランドを含めた国際関係と合従連衡の動きに依存していた。1695年から1715年のスペイン継承戦争の期間中、フラ

ンスはジャコバイトを援助した。1708年、老僭称王軍をスコットランドに派遣したが英国艦隊を眼にして逃亡、1715年反乱では、合邦条約撤廃がモットーとなり、ナショナリズムの様相も呈し、マー伯はジャコバイト最強の軍隊を召集することができた。その支持の中心はアバディーン、アンガス等の北東部にあったが、ハイランドクランのうち15氏族は監督制教会派でスチュアート主義を全面的に支持し、その行動はアーガイル伯に対する敵意によるものであった。8氏族は長老主義で特にアーガイルはホイッグ政府の政治的代理人として政治権力を行使した。カトリックは6クランで反乱に加わったが、ジャコバイト勢力の5分の1以上を構成することはなかったのである。

15年の反乱後、スコットランドの伝統的権力は次第に政治的パトロネージによってとってかわられ、地方の支配も変容していく。当初、スクアドロン派がモントローズ公やロクスバラ公をスコットランド国務相として地方行政官を監督したが、ウォルポールは1725年以降、アイレイを事実上の国務相として官職の分配権を与え、キャンベル家を媒介としてスコットランドを支配し、フォーブズ等を重用した。アーガイル公は反乱に加わらないよう借地人に誓わせたが、ジャコバイト主義はキャンベル家へ反感によって増幅され、そのパトロネージもスコットランド全体に影響力を持つことはなかった。

1716年に英仏同盟が成立し、ジャコバイトにとって大きな障害となったが、イギリスは1739年にスペインに宣戦し、砦から守備隊が移動したハイランドでは権力の真空状態が生じつつあった。1741年にオーストリア継承戦争に関与し、43年にはフランスの外交政策は変化し、再びジャコバイト支援が重視されることとなった。44年にフランス軍がチャールズ・エドワードと合流しロンドンに進撃する計画が準備されたが、大嵐がフランス船隊を襲い侵入は中止された。45年のチャールズの遠征はジャコバイトへのフランス支援をせきたてる無謀な行動ともみられ、実際ダンヴェガンのマクラウドやスリットのマクドナルドなどは参加を拒絶した。彼らはクラン住民をアメリカに人身売買しようとした件等でフォーブズの影響下にあったという事情もあるが、やがて反乱軍は勢力を拡大し、スコットランドを支配下に置くこととなる。1742年にウォルポールが首相を辞任し、アイレイのスコットランド支配も崩壊しており、新たにスコットランド国務相となったティーデイルの危機管理意識の欠如とアーガイルに対する対抗意識のため、民兵徴集権をアーガイルに与えず権力の空白状態を放置させたことが、ジャコバイト軍の快進撃を可能にしたのである。反乱当初、イギリス軍の大部分も大陸に派遣されており、この反乱を単に無謀な猛進とすることもできないのである。

反乱軍がハイランド服を着用していたこともあり、反乱の中核はハイランド兵士という神話も生じたが、1715年と同様、この反乱の最大の支持基盤はテイ川以北の北東部の地域であった。ジャコバイトの中にも農業改良者や商業的関心を持つ者も多く、逆に窮迫したクランチーフが政府側につくこともあり、中産階級はジャコバイト主義を全面的に拒否し、商業階級の中にほとんど支持を見出さなかったとする従来の見解は再検討を迫られているのであるが、さらに密貿易業者もジャコバイトと重要な関係を維持していたことを見落としてはならない。1707年以降、貿易の比重はヨーロッパ大陸から西方の植民地に移り、植民地帝国を中心とするスコットランド経済軸の移動によって特に東海岸の港や町は経済的苦境に陥り不満があふれていた。この先細りの市場と差別的課税、自由な外国貿易の制約への東海岸の反応として密貿易が増加し、ジャコバイト主義、監督制主義もそれに

支えられ、相互依存の関係や連帯感も生まれ、この地域の監督教会派の不満とジャコバイトの反ハノーヴァー主義とが結合することとなったのである。この1745年の反乱に結集したジャコバイト軍は、1715年と同様、少なくとも最終局面にいたるまでは、イギリス政府軍をはるかに凌駕し、ほとんどの反乱において、ジャコバイト支持はホイッグ支持よりも一貫して高かったのである。ジェレミー・ブラックも指摘するように、ジャコバイト反乱は18世紀の英国が直面した最も大きな軍事的挑戦の1つでもあり、上述した様々な観点からさらに再検討することが求められているのである。

## 注

1) John L. Roberts 2002 *The Jacobite Wars: Scotland and the Military Campaigns of 1715 and 1745,* Edinburgh ix-xi.
2) Murray G. H. Pittock 1995 *The Myth of the Jacobite Clans*, Edinburgh 45.
3) John L. Roberts, *op. cit*, 3,8,16,17. Bruce Lenman 1984 *Jacobite Clans of the Great Glen*, Manchster 130.
4) T.M.Devine 1999 *The Scottish Nation*, New York 36.
5) Daniel Szechi 1994 *The Jacobites*, Manchester 72. John L. Roberts, *op. cit*, 16.
6) John L. Roberts, *op. cit*, 17, Daniel Szechi, *op. cit*, 73.
7) Anthony Cook eds 1998 *Modern Scottish History* Vol.1 Dundee 34. C. Jones ed 1987 *Britain in the First Age of Party* 194.
8) Daniel Szechi, *op. cit*, 77. Raymond Campbell Paterson 2001 *The Lords of the Isles* 174-175.
9) John L. Roberts, *op. cit*, 50.
10) Daniel Szechi, *op. cit*, 73-74.
11) John L. Roberts, *op. cit*, 18-20, Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 49-51. Michael Lynch, *Scotland* 1991 *A New History* 334.
12) Bruth Lenman 1980 *Jacobite Risings in Britain 1689-1746* London. John L. Roberts, *op. cit*, 20-21.
13) Allan Macinnes 1996 *Clanship, Commerce and the House of Stuart Clanship* Tuckwell 180-190. John L. Roberts, *op. cit*, 18-22.
14) John L. Roberts, *op. cit*, 22.
15) Bruce Lenman, *Jacobite Clans*, John L. Roberts, op. cit, 22.
16) T.M.Devine, *op. cit*, 40-41. A.I. Macinnes 1996 *op. cit*., 180-191.
17) A.I. Macinnes 1996 *op. cit*., 192. 3つの反乱における13のジャコバイトクランの中で、9はアーガイル家の支配圏に含まれていた。I.D.Whyte 1995 *Scotland Before the Industrial Revolution, c. 1050-c.1750*, Longman 158.
18) I.D.Whyte, *op. cit*, 254. Raymond Campbell Paterson, *op. cit*,, 178.
19) I.D.Whyte, *op. cit*, 263-265.
20) C. Jones ed., *op. cit*, 244, Lenman, *Jacobite Risings*, 28-9 ; John Stuart Shaw, *The Management of Scottish Society, 1707-1764*, 48-53.
21) C. Jones ed., *op. cit*, 256-257, John Stuart Shaw, *op. cit*, 44-53, N.T.Philipson and R. Mitchison ed., 1970, *Scotland in the Age of Improvement*, 5-27.
22) I.D.Whyte, *op. cit*, 269-270. Ian D. Whyte 1997 *Scotland's Society and Economy in Transition, c.*1500-*c.*1760 Macmillan Press 113. N.T.Philipson and R. Mitchison ed. 1970 *op. cit.*, 15. A.I. Macinnes 1996 *op. cit*, 194. C. Jones ed., *op. cit*, 193, Murray G.H. Pittock 1998 *Jacobitism* 94.
23) John L. Roberts, *op. cit*, 59-60.

24) John L. Roberts, *op. cit*, 61, 64. Daniel Szechi, *op. cit*, 94.
25) Daniel Szechi, *op. cit*, 87-92. T.M.Devine, *op. cit,* 39. Murray G. H. Pittock, *op. cit,* 53.
26) John L. Roberts, *op. cit*, 68-69. Daniel Szechi, *op. cit*, 94.
27) Daniel Szechi, *op. cit*, 95-96.
28) John L. Roberts, *op. cit*, 70.75.
29) John L. Roberts, *op. cit*, 76.
30) John L. Roberts, *op. cit*, 77,79.
31) Raymond Campbell Paterson 2001 *op. cit*, 178-181. Peter Simpson 1996 *The Independent Highland Companies* Edinburgh 132-140.
32) John L. Roberts, *op. cit*, 83, 102.
33) Daniel Szechi, *op. cit*, 99.
34) Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 43,108. N.T.Philipson and R. Mitchison ed., *op. cit*, 37-43. P.Simpson, *op. cit*, 161.
35) Anthony Cook eds, *op. cit*, 34.
36) John L. Roberts, *op. cit*, 103-107.
37) Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 45-48.
38) Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 54-56, Michael Lynch, *op. cit*, 334.
39) Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 57-58, 60-62.
40) Lenman, *Jacobite Risings*, 246-247, Murray G.H.Pittock, *op. cit*, 43,82-84,108.
41) Murray G.H. Pittock 1998 *Jacobitism* 18,30,35,42,60-65,93-94. Murray G.H.Pittock 1995, *The Myth* of the Jacobite Class 80. Hugh Douglas 1999 *Jacobite Spy Wars* 37-39, 50, Daniel Szechi, *op. cit*, 24, 26.
42) John L. Roberts, *op. cit*, 115. Daniel Szechi, *op. cit*, 99-101.
43) John L. Roberts, *op. cit*, 118,124,126,169. Daniel Szechi, *op. cit*, 101-102.
44) John L. Roberts, *op. cit*, 20, 184, 199. Murray G. H. Pittock, *op. cit*, 86. Ian D. Whyte, *op. cit*, 113.

**キーワード：**ジャコバイト　スコットランド　ハイランド　クラン

(WATANABE Yuji)